

暖帯林の地域 本帯は、沖繩島の中央以北から九州四國の全部及び北緯三十六度の本州中部に亘り、等温線は二十一度から十三度までを保有する地域である。然しながら其の北境は海岸地と中央内地とによりて、限界に多少の差がある、即ち太平洋岸及び日本海岸に於ては、約北緯三十七度半が北限であるけれども、内陸に入るに従つて漸次南退して、北緯三十五度で終る所がある。何故かと言ふに、太平洋岸及び日本海岸は海洋の感化によつて著るしく北進すれども、内陸地方は土地が高峻なる爲め、氣候が寒冷であるから、甚だしく南退するのである。

暖帯林の鉛直分布 而して其の鉛直的分布は、臺灣に於ては凡そ千五百尺の高さより始まり、沖繩島中央にあつては既に海面に落ち、又本帯の上部限界は臺灣に於ては六千尺の高度に達し、九州南部では三千七百尺、北部になれば二千二百尺に降つて居る、而して平均二千八百尺を上部限界とする。ソレから四國に於ては、平均二千五百尺となり、本州では二千尺乃至千五百尺に低下し、警城に到つて全く其の跡が絶へて居る。

## 暖帯林相

本帯特有の林木は、檜類、楠類等の常緑潤葉樹であつて、其の種類は頗る多く、二十四属五十二種に達して居る。然しながら、本帯地域は人文最も早く開けた地方であるから、數千年來人爲的に伐採され、又は開拓された結果、今日では固有の常緑潤葉樹林は大いに減退し、却つて落葉潤葉樹林、松林等が増殖されて居る、併し猶ほ人跡類繁ならぬ山地に行けば、四時蒼々たる檜類や山茶類の天然林が尠なくない。即ち四國や九州の地方では、シラカシ、ウラジロカシ、イチヒカシアカ、シウバメカシ、ツクバネカシ等蒼蒼として繁茂し、殊にイチヒカシは櫓權に作つて薩隅兩州から輸出され、又シラカシは肥後天草の産最も有名で、古來槍の柄として重用されたので、舊幕府時代から保護林として伐採を禁せられたものである。ソレで今尙森々たる喬木が、丁度針葉樹の様に亭立して、拱圍七八尺、枝下十間に餘るものが少なくない、又九州地方一般に、檜は木炭として常用されて居る。樟は南部に於て特に多いが、これは、元來天然林を成さず、大抵は人爲的に繁殖されたものである。

櫛帶Ⅱ温帯



温帯林域 本帯は暖帯即ち楮帯の終る所から始まり、北海道の南西部に及んで居る、而して其の水平的帯域は、本州の海岸にあつては、北緯三十七度に始まり、又内陸では北緯三十五度に始つて北海道の南西岸に至る、廣濶なる地域を領して居る。又鉛直的帯域は、本帯の下部限界は即ち暖帯に於る上部限界であつて其の上部限界は臺灣に於ては一萬五千尺の高度に達し、琉球、九州及び中國地方では上部限界に達する高山がなく、四國にあつては石槌山が凡そ六千八百尺の高度に及び、本州の中部なる駿遠地方では五千六百尺乃至五千八百尺に終り、甲信地方にあつては五千尺となり、奥羽地方に於ては四千七百尺乃至三千五百尺に下り、殊に陸奥では僅々三千二百尺の高度となる、又北海道南部に至れば更に下つて、一千五百尺となり、進んで中央部に入れば既に海面と一致して居る。

榊の分布 本帯の特有林木は、榊であるが、併し南部に於ては人工の結果によつて之れを見ることが出来ないけれども、暖帯特有の林木たる檜類全く消滅して居るので、本帯に屬して居ることを認めるのである。又北海道の中部に於て

も榊を見ることが出来ないけれども、蓋し是れは時々野火があるので、榊の成長を妨害したからであらう。

温帯林相 本帯は南北によつて稍、氣候が異つて居るから、林相も從つて稍、異なつて居る。即ち温帯南部の林木は、樺、七葉樹、厚朴、刺楸、胡桃、桂樹、槭樹、樺、檜、白楊等の落葉潤葉樹であつて、處々に亦針葉樹の發達したるをも見受けるのである。ソレで冬季に於ては、針葉樹林を除く外は、満目盡く枯林で、また綠樹の片影を見ぬ、頗る寂寥たるものである。又温帯北部の林木は、本州の北端海岸にあつては、榊、オホナラ、ミヅナラ等が大森林を成し、又針葉樹屬のアスナロの良林もある。北海道に於ては、此等潤葉樹林の上部にトドマツの混生するを見、且つ潤葉樹の種類は大に減じて、温帯南部に於ける約半数となり、六十種位に過ぎぬ。

温帯の林價値 温帯林の南部に於ける針葉樹林は、我が國の林業上最も價値あるものである、例へば木曾、青森、秋田の良林は、全國に其の比を見ない所である。就中木曾の五木たるヒノキ、サハラ、ネズゴヒバ、カウヤマキ、及び秋田の杉は極めて優良なるものである。



寒帯林の地域

白檜棍松帯 II 寒帯。 附 偃松帯。

寒帯林の地域 本帯は等温線六度以下なる北海道の北東部以北であつて北海道ではトドマツ、クロエゾマツ、アカエゾマツ、アラギ等が主林を成して居る然れども噴火、地滑、雪類、洪水等其の他種々の天變地異により若しくは伐木燃焼の如き人爲によつて針葉樹の生えない地ではシラカバ、タケカバ、ミヤマハンノキ、ヤマハンノキ、イタヤカヘデ、ナナカマド及びミヤマザクラ、ヤマザクラ、エゾウハミヅザクラ等の潤葉樹林が生えて居る然しながら久しく放置するときは前記の針葉樹生じて次第に潤葉樹を壓倒し遂に固有の針葉樹林となつたのである。

寒帯林の鉛直分布

寒帯林の鉛直分布 本帯の鉛直限界は臺灣にあつては一萬五百尺から始まつて一萬四千三百五十尺に及び九州では全く此の帯なく四國に於ては六千尺なる石槌山に多少の白檜層を見又本州にあつては富士、御嶽、日光及び其の他の高山に於て之れを見るのである。而して此等の諸山に於ては天凡六千尺に始まり八千五百尺に終つて居る又本州に於ける本帯は大概峻嶮なる山岳で、強風

偃松の分布

偃松の分布 偃松帯は白檜棍松帯の終る所に始まり九州、四國では全く之れを見ることが出来ぬが本州になれば僅かに信州の御嶽、駒ヶ岳及び秋田の鳥海山、青森の八甲田山等の絶頂に於て之れを見富士山に於ては火山岩が未だ風化せないので落葉松まで植物帯は終つて居る。然しながら進んで北海道に至れば既に三千尺の所に降り特に千島諸島では偃松は殆んど全島に蔓延して居る。又内地に生ずるカラマツの一種なるシコタンマツは色丹、擇捉等のハヒマツの出来る所にあつて大抵屈曲して偃松と同様の成長を爲すのである。

四季氣候の變遷と植物の變化

植物に要する氣候要素 凡そ植物に最も必要な氣候の要素は温度と湿度である。風雨晴曇固より植物に影響を及ぼすこと大であるけれども日射と

植物に要する氣候要素



植物温度との關係

氣温、雨量と濕氣は概して相伴ふものであるから、温度及び湿度と植物との關係を述べれば他は自ら解せられる譯である。  
**温度と植物との關係** 植物は概して高温なるを好むものである。植物の種類によりて温度を要する量に差あるは勿論であるが、概して云へば植物は夏季六、七、八の三箇月の平均温度二十度乃至二十五度の間に於て最もよく生育するのである。然して我國の大部分はかゝる最適氣温の範圍に屬する。是れ我國に諸種の草木鬱蒼として地表を蔽ふて國土の美を飾りて居る所以である。尙ほ普通植物の生活し得る最低温度は零度で最高温度は四十度乃至五十度であつて最適温度は二十二度乃至三十七度である。而して日光も亦植物の同化作用に缺くべからざるものであるが、概して高温なる地は日射も強く日照時間も長きが常であるから、高温なる地は植物の生長に適するのである。  
**湿度と植物** 温度如何に最適なるも、水濕が十分でなければ植物は決して生育しない。彼のサハラ沙漠の如き其の適例である。元來植物は根によりて地中の水分を吸収し、葉より蒸發する作用をなすものであつて、其の吸収する水

植物湿度と植

分と蒸發する水分とは常に互に平衡を保たなければならぬ、然るに若しも大氣中の濕氣にして不足ならんか、葉の蒸發作用激しくなりて、根より吸収する水量は之れを補ふ事が出来ぬので、葉は凋萎し、遂に枯死することになる。一般に植物殊に樹木の生育に對しては湿度大なるに過ぎたることはない、即ち濕氣多き程生長は旺盛となり、少き程生育不良となるのである。而して植物生長期間即ち五、六、七、八の四箇月間に湿度五〇%以下なれば如何に肥沃なる土地でも樹木は生育しない。然し草本に至つては其の種類頗る多く、全く水中に生育するものもあれば、又湿度大に過ぐれば蒸發作用を妨げられ、其の體內水分の新陳代謝が出来ず、従て根より養分を吸収することが出来ぬ爲め、生長却つて不良となるものもある、植物中乾燥に堪ゆるものはよく四箇月間平均五〇%以下の地に於ても發育し得るものである。併しかゝる植物でも尙一層湿度小となれば、遂に枯死し、彼の沙漠の如く綠影を見ざるに至るのである。然るに我國は前述の如く多雨多濕で夏季各地の平均湿度は概ね八〇%に及び、少きも六〇%を下らず、多きは九〇%餘に達する所がある。是れ我國に諸



種の植物よく繁茂する所以である。  
 四季と植物 植物は四季の氣候に伴ふて種々に其の形態及び作用を變ずるものである。熱帶地方にありては四時斷へず花咲き葉茂りて、常夏の有様を呈すれども、温帶地方に於ては四季によりて氣候に大差あるから、其の植物も亦極めて變化に富んでゐる。即ち概していへば樹木は春より夏に亘りて花を著けて繁茂し、秋より冬に掛けて凋落し、或は枯死する。又草本は春夏秋冬各、其の種類を異にし交々特殊の叢落をなして山野を飾つて居る。斯の如く四季により植物の形態或は種類に變化あるは全く四季に應じて植物に必要な氣候要素即ち温度及び湿度に大差あるからである。

植物の發芽開花 植物はなせ春に發芽し或は開花するか、植物の春季に發芽し又は開花するは其の氣候要素即ち温度及び湿度が植物の發芽及び開花に適するからである。元來植物は一定の温度及び一定の湿度を保たしむれば、何時にても發芽し又開花するものである。彼の温室に於て冬間花木、草花を培養するは此の性質を應用したるに外ならぬ、さて我が國中部の春季平均温

度は十度乃至十五度で、雨量も冬季より多く、又湿度も高くなるから、此の地方に於ては大抵三月になれば諸種の樹木發芽する、殊に落葉樹に於て著しく見へる、夫れより氣温の上昇するに従つて、日増に蕾芽ともに肥大し、三月下旬より四月上旬に至る頃には嫩芽展披し、或は開花する。諸種の雜草作物等も此頃より發芽し、若しくは生長するのである。例へば梅及び染井吉野等の櫻は葉に先ちて花芽を開き、三月下旬より四月にかけて桃、彼岸櫻、山櫻など爛熳として咲き出づるのである。櫻は臺灣にては一二月頃開花し、鹿兒島にては三月上旬頃より咲き初む。又木蓮、山茶、莫、蓮翹、迎春花、黃藤等も仲春の花木として庭園を飾る。野には紫雲英、蒲公英、菜種など、萌え出づる綠葉に交り、所謂彩霞、紅雲山野に舞き蝶舞ひ鳥歌ふ最も愉快なる光景を呈するのである。  
 夏は植物繁茂の季節 五月より六月に亘りて温度は漸く上り、殊に燕子花、花菖蒲、溪蓀等の花咲く頃は所謂梅雨期で、連日降りみ降らすみの天氣であるから、湿度甚だ大で植物は蒸發過多の爲め凋萎するの患なく且つ温度も十分であるから、草木は思ふが儘に嫩芽を展開し、滴るばかりの新緑を呈し、又生長最



も速かで水分を要すること多き筈も所謂『雨後の筍』といへる如く此期に於て蘆出する。又藓苔地衣の類までも青色を加へ、隠花植物も亦簇生し之れが爲に菓樹作物等の病害を被ることもある。又花の蒸發盛なる藤、棗、櫻草、躑躅、牡丹なども麗はしく咲き出づるのである。次に七月、八月に至れば温度は二十度乃至二十五度に上り、日射時間長く、光度強きを以て、同化作用最も旺盛で葉は全く發生を遂げ濃綠色となり、組織硬化して盛夏にふさはしい緑樹重蔭の光景を呈することになる。而して草葉は概ね日中強熱の爲め蒸發水分に不足を生じ多く垂下すれども日暮涼風訪づれる頃となれば忽ち蘇活し殊に朝露を宿せる晨の野草は生々として發育の氣に充ちてゐる。又春の花は多く淡紅、黃白等の色なるものが多いが、夏の花には紅、紫、琉璃等の濃艶なるが多い。是れ亦強度の刺戟に對する反應で葉の濃綠とよき對照をなしてゐる。又朝顔、夕顔、月見草の如く晝暑を避けて開花するものも多い。

秋と植物

秋と植物 秋立ちて十月の節に入れば、草木の種實成熟し、落葉樹は紅葉し初

む。紅葉を見るは暖帶の特徴であつて、殊に北米と亞細亞の東北部に於て著明である。我國では到る所之を見ざるなきも、殊に日光妙義の諸山、京都の嵐山、高尾、梅尾の如き、中國では寒霞溪、九州では耶馬溪等最も有名である。さて紅葉は主として氣候の變化に、基くもので、中秋より晩秋に亘りて、春夏の候既に固有の官能を遂げ終れる葉が氣温の低下と大氣の乾燥との爲めに、一種の化學的變化を起し、葉肉組織の細胞内に紅色の液體、即ち花青素と稱する色素を生じ、之と同時に葉緑素は變質して遂に全く其色を失ひ、葉内紅色液のみに充たさるゝに至るのである。かくて十一月風の吹き荒む頃となると所謂離層組織のある點より、片離として離落するものである。紅葉の美なるは槭樹を以て主とするけれど、アカシデ、ナ、カマド、ガマズミ、錦木、マユミ、躑躅、其他柿、槲等々の紅葉も亦山野を飾るに足るものである。然して紅葉は水邊に多く、殊に奇勝に配して夕陽に映ゆるところは春花も及ばぬ美觀である。然しながら秋の眺は獨り紅葉のみではない。即ち菊花の如きは秋の花卉の代表華で亦我國草花の粹であるから本邦到るところに栽培せられ其種類も頗る多い。



冬の植物

其の他萩、桔梗、藤袴、河原撫子、葛、女郎花など枯れ行く山野に残りの色を留むるは哀れ深く、萩、薄の風に戦ぐは蕭殺の氣を増すものである。

**冬の植物** 冬は植物の休止期若しくは枯死期である。冬の温度は植物の生活作用を營むに不足であるから、秋末葉を拂へる落葉樹はもとより、常緑樹と雖も、發育作用微弱となり、殆ど休止の状態となり、又多くの草本は枯死して所謂「デッド・ライン」なる光景を呈するのである。けれども精細に観察すれば草木共に決して全然其の活力を滅失したるのではなく、一時寒威を避くる爲めの越寒の準備に外ならぬのである。即ち枯木の如き觀ある落葉樹も、其の莖の下部が根又は皮層、木質髓等に多量の養分を貯蓄して陽春發動の機を待ち、又其の冬芽をば幾重ともなき鱗皮にて厚く被護し、或は特に樹脂、密毛等を生じて以て嚴寒霜雪を防ぐのである。又一年生の植物は種子を残して枯死するものが多い、此等の種子は概ね堅き組織によりて保護せられ、多量の養分を貯へて居る。又宿根草は冬間深く地中に根を存し、或は長き地下莖、塊根、鱗莖等を具へて養分を貯蓄し、温き土中に於て安全に冬を過すのである。かく諸

植物の作用

種の草木は秋末より生長を休止し、種々の方法によりて越寒し、一陽來復の春を待ちて再び其の活動を始むるのである。

植物の氣候に及ぼす影響

**植物の作用** 氣候は以上述べたる如く、植物の分布を司る一大勢力であるが、植物も亦氣候に多少の影響を與へるものである。

蔽植地の温度

**蔽植地の温度** 植物の熱容量は、岩石土地等に比ぶれば遙かに大である。而して樹木、雜草又は蘚苔を以て蔽はれたる地面は直接に太陽の熱を受けず、此等植物の受けたる輻射熱によつて温めらるゝのであるから、從つて受熱量は等しきも温度を高めることは少い。加之草木は其の盛なる蒸發作用によりて受熱の一部を奪ふのである。故に植物を以て蔽はれたる地上の氣温は裸出の地面に於けるよりも低い譯である。

森林と氣温

**森林と氣温** 又森林中の氣温も、前と同様の理由により、林外の氣温に比ぶれば較、低い尤も春、夏、秋、冬によつて多少の差はあれども、平均すれば、年を通じて一度五丈け低い。然し最寒の時及び夜間等には、樹蓋及び雲霧の爲めに地熱の



森林と風

放散を妨ぐるから、林内は反つて林外よりも高温となることがある。但し、森林の疎密、林樹の種類等によつても多少の相違あるは勿論である。  
森林と風 森林は空氣の流動を抑制する。故に森林地に於ける風力は常に林外よりも弱く、且つ森林は外方より吹き來る風を上昇氣流に變せしむる作用をなすものである。是れ古來我が國各地に防風林の設けある所以で、又森林が雨量を多からしむる一原因である。

森林と雨

森林と雨 植物は又水蒸氣の凝集を促すものである。即ち林外の空氣が森林地に入る時は、氣温の低下によつて、比較的湿度大となる、若し又其の空氣が飽和點に近いものであつたならば、忽ちにして飽和點に達するので、剩餘の水蒸氣は霧か或は雨になつて分離するのである、ソレのみならず植物の枝葉は絶えず多量の水蒸氣を蒸發するから、森林の湿度は常に大きい。是れ森林地が常に霧深く、又雨量の多い所以である。

森林と蒸發水源

森林と蒸發水源 森林は斯の如く氣温を低減し、湿度を大ならしめ、且つ太陽光線の直射を遮り、又は風の運動を抑制するものである、而して此等の諸件は

森林と外圍の氣候

森林地、の蒸發を遅緩ならしめ、以て地中の水力を保存する作用をなすのである、實驗する所によれば、林地の水分は地面から蒸發するは其の四〇乃至四五%で、残りの六〇乃至五五%は地中に殘留するのである。ソレで森林地は頗る多量の雨水を地中に貯蓄して、地下水、河川の泉源を涵養する作用を成すのである、山林を濫伐した結果、往々河水の減少、若しくは涸渴を招き、灌漑の便を欠き、非常なる損害を蒙ることあるは、全く此の理に基くのであつて、近くは福岡縣の水源の涸渴の如き其の一例である。

森林と外圍の氣候 森林は又外圍の氣候殊に雨量に影響を及ぼすことが多し。前述の如く森林は空氣中の濕氣を凝集し去るを以て、風向と反對せる森林の側面に於ては、往々雨量の少いことがある、又四方大森林によつて圍まれたる地は概ね雨量が少ない、之に反して森林の風上にある地及び森林附近の地は比較的雨量が大である。我國の表裏兩面によりて陰晴及び雨量に大なる差異あるは、固より中央山脈の高峻なるに由るのであるが、亦此等山脈が概ね鬱蒼たる森林を以て蔽はれ、濕氣を凝集保留するに適して居ることも、其の原



因の一である、尙ほ本邦雨量の甚だ大なる、夏暑の割合に凌ぎ易き、或は河川急なるに拘らず、水流滾々として盡きず、到るところに穰々たる稻田を見るが如きも、亦森林の氣候に及ぼす影響による事が多い。

結 論

水魚人氣  
の關係

水魚人氣の關係 之れを要するに此の氣界は吾人の棲所であつて、大氣は終始吾人に付き纏つて瞬間片時も大氣と離るゝことはない、人の楽しむも、苦しむも、働くも、憩ふも、臥るも、起るも氣界中に外ならぬのである。「水魚」と言つて魚の水中に接んで水と離れられぬ最も親密なる關係を言ふが、人の氣中に住んで人と氣と離れられぬ關係は水魚と異ならぬのである。斯く吾人には緑深き氣界であるが、何分にも大氣其の物が目にも見えず、臭いもなく、味もなき爲めに、屢々人から忘れられんとする、併し吾々は此の世に生れて以來、其の目に觸れ耳に聽くものは概ね氣界中に起る天然又は人事上の現象であることは、既に縷々述べた通りである。斯く吾人と親密なる關係を有する氣界に就きての知識は

今日までの所、只其の端緒を得たるに過ぎぬ、今後益々氣界の真相を闡明し、其の千變萬化する状態を究め、而して愈々之れを利用するには、尙ほ多くの餘地を存する、サレバ吾人は一層の興味を以て之れを観察し、又一層の努力を以て研究する必要があることと考へる。

大日本  
地文學 氣界講話終



大正二年三月二十八日印刷  
大正二年三月三十一日發行

大日本地文學氣界講話

正價貳圓貳拾錢

著者

矢津昌永

發行者

東京市日本橋區通三丁目十四、十五番地  
丸善株式會社

右代表者

專務取締役 小柳津要人

印刷者

東京市日本橋區兜町二番地  
神谷岩次郎

印刷所

東京市日本橋區兜町二番地  
東京印刷株式會社

不許複製

發行所

東京市日本橋區通三丁目  
大阪市東區博勞町四丁目  
京都市下京區三條通麩屋町西へ入

丸善株式會社  
丸善株式會社大阪支店  
丸善株式會社京都支店  
丸善株式會社大阪第一七三番



# 前著 日本地文學批評

毎日新聞批評

日本地文學 は理學博士小藤文次郎氏の校閲矢津昌永氏の編述なり抑も地文の學たる上は天文より下は地理に至り氣界陸界水界氣候等の性質運動變化を論し其外界に及ぼすの關係影響を究むる者にして教育上の基礎たるべきは勿論一般人民として必ず知らざるべからざるの學科なり去ればにや我國に於ても從來此學に關するの書籍々として出で汗牛充棟も音ならざしと雖も之れ皆な普通地文學の大體を講ずるに過ぎず今此書は此等の者と異なり其名の示すが如く専ら我國の事に付き立論したる者にして其引用の事實の如きは中央氣象臺地質局水路部等に付き調査したる由にて著者自から引用の廣さと事實の精確なるべきは余の聊か自ら誇る所なりと云へり文章は流暢にして彼の乾燥無味の如き者に非ず間々精巧なる圖畫を挿みて文の足らざる所を補へり思ふに著者は餘程此學に熱心なる者と見へ余は霜頭白鬚を揮ふて再び日本地文學を編述して以て余の初志を全ふせんとす云々と誓へり宛に角當時群々たる雜書中此の書を見るを得たるは吾人群鷓中白鶴を認めたるの感あるを覺ゆるなり(丸善商社發兌)

時事新報批評

日本地文學 今ノ日本ノ學者ハ古代ニ親シクシテ近世ニ疎ク外國ニ精ウシテ本邦ニ粗ナリ蓋シ習ヒテ察セサルモノナラントハ心アル者ノ常ニ歎息スル所ニテ理學大進歩ノ今日ニ當リ絶ヘテ本邦ニ關スル地文學ノ著述ナカリシモ亦其一ケ條ナリシテ學理實驗兩ナカラ精密周到ナル此日本地文學コソ洵ニ一大缺典ヲ補ヒ得タルモノニシテ而シテ著者ハ其取調編述ノ苦辛ニ對シ充分ノ報酬ヲ得ルヤ必然タルベシ殊ニ印刷鮮明圖畫精巧ナル上ニ此般ノ書類ハ文字ノ乾燥無味ナルヲ常トスルコトナルニ夫レサヘ雄健雅快ニシテ凡テ出色ノ著述ト云フテ不可ナキナリ

郵便報知新聞批評

日本地文學 (矢津昌永著丸善發行)我國地文學の良著書あるを聞かず偶々此學に關する記事なきに非ずと雖も多くは斷編にして完璧を成さず日本地文學は著者か中央氣象臺地質局水路部等に就きて諸種の材料を蒐集し天然地理の原理を説明するに此

事實を以てしたるものにて苦心の有様毎章に現はれ氣界陸界水界の諸現象を網羅して之を説くこと明瞭なり只た著者か自から遺憾とする如く我國に於て動物の分布等に事實の材料を缺けるは如何にも残念なり然れども著者は霜頭白鬚を揮ふて編述に従事すと言せり後來又た更に完全なる地文學書となるの期あるべし

日本人批評

日本地文學 本書は矢津昌永氏の編述せるものにして小藤博士の校閲せるものなり余輩は本書の如きものゝ世に出づるを喜ぶものなり蓋し教科書の如きは到底反古紙製造者の如きものゝ手に成る可らざるものなればなり且つや文部省が濫かに中學校師範學校科目中に日本地文學の科を加へられたれ共適當なる教科書なきに苦しみつゝあればなり今本書を見るに其順序は重なるに獨人ライン氏の著の「ジャッパン」に則れるが如しと雖も水界の部に於ては該書よりも遙かに精細なる調査あり且又緻密なる圖畫を挿んで一々解説し來りたるものなればライン氏の書に如く大本にもあらず學生に取ては頗る利便なるべし而して編者は永く地文學の教師たりしの經驗よりして本書を著はし尙ほ進んで日本大地文學を著さんとの志ある士たり聞者は地文學者中其人ありと聞えたる小藤博士なれば眞に近時上梓せる教科書中の第二位に下らざるべし中學校師範學校は勿論文部省に於ても其の平生の不足を補ふを得て頗る満足するならん信す

東洋藝藝雜誌批評

日本地文學 此書ハ矢津昌永氏ノ著ニシテ小藤博士カ充分ニ校閲サレタルモノナリ世間地理書少カラスト雖トモ地文學書ニシテ斯ノ如ク我日本島ニ就テ之ヲ説キタルモノハ未タ之レナキナリ而シテ其材料ハ吾國ニ關スル學術研究ノ結果ヲ直ニ其源泉ヨリ得來リタルモノニシテ其論スル所極メテ適切ナリ例ヘハ第一編ハ總論ニシテ地球ノ形狀運動ヨリシテ經度緯度ノ事經度ト時ノ關係及日本標準時ノ事ヲ説キ終ニ日本ノ位置ヲ明ニス第二編ハ空氣、氣壓、及其天氣トノ關係我邦一年間氣壓ノ變化、溫度及溫度ノ變化ヲ生スル諸原因及日本ノ溫度、霜、霧、霞、幻象、太陽、雪、雨、及雨量、雨量ニ影響スル諸原因等其他梅雨ノ理、雪、霰、雹、怪雨等總テ本邦氣象觀象ノ實例ヲ擧ケテ之ヲ説明シ又風ノ事ハ其數多ノ種類ヲ掲ゲテ詳ニ之ヲ論シ最後ニ氣象學ノ大略ヲ述べ天氣豫報ニ論及セリ第三編ニハ總テ日本ノ今日ノ如キ有様ニ至リタルマデノ地史、海岸線、地水、河流、湖沼、平原、山岳、火山(附、磐梯山爆發ノ記)、地震及磁氣ノ事ヲ詳論シ第四編ニハ海洋ニ關スル事即チ海水ノ組織、溫度、運動、海ノ深サ、湖、海流、及氣候トノ關係ヲ説明シ第五編ハ日本ノ氣候ヲ論シ農耕及植物トノ關係ヲ説明セリ



是ニ由リテ以テ此書ノ論スル所ハ日本人タル者ノ知ラザル事柄ナリ而シテ其論據ハ皆確實ナル研究又ハ觀測ノ結果ナリ加フルニ精密ナル銅版及採色圖十數個有リ實ニ善良ノ書ト云フ可シ

教育時論批評

日本地文學 矢津昌永編述 丸善商社出版 著述世界ニ於テ出版世界ニ於テ最モ精細アル最モ利益アル新著ト謂フベキモノニシテ我等ハ之ヲ世ノ教育家ニ紹介スルニ臨ミ十分ニ著者ノ功勞ヲ世人ニ告ゲザルベカラズ抑々地文學ニ於テ研究スベキ事柄ハ天地事變ノ喜ブベク驚クベキ者ヲ網羅シ荷モ生ラ陸上ニ寄セ氣ヲ兩間ニ受ケテ以テ生存スルモノガ片時モ其關係ヲ絶ツアタハザル水土、空氣ノ現象説明スルモノナレバ教育上ニ於テハ兒童ノ視察力ヲ鼓舞スルカ爲メニ、兒童ニ天地間ノ現象ヲ解釋シ利用スルノ知識ヲ與フルガ爲メニ實リテ教授ノ材料ト爲サルベカラズ而シテ理科ノ諸分科中ニ於テ此學ハ實ニ多ク生徒ニ興味ヲ覺ヘシムルコトヲ得ベキモノナリ

然レドモ斯ク此學ヲ教育上ニ應用スルニハ教師ハ先ヅ自ラ地文學上ノ事理ニ精通シ自ラ此學中ノ興味ト實益トヲ知ラザルベカラズ然ルニ從來地文學上ノ著譯ハ實ニ甚ダ十分ト云フベキ者ナク讀ミ去リ讀ミ來リテ其喜ブベキ樂ムベキ點少キニヨリ有心ノ讀書家モ識ラズ知ラズ半途ニ捨テ、更ニ他ノ利益ナクシテ徒ニ蕩志ノ書アル小説等ヲ讀ムニ至ル故ヲ以テ一般ノ教育家ハ地文學上ノ知識甚ダ乏シク從テ小學教育ノ上ニ此學ヲ應用スルノ効力甚ダ少ナカリシナリ然ルニ此書ニ於テハ著者ガ非常ノ勤勞ヲ以テ例ヲ近キニ取り事實ヲ日本内ノ現象ニ求メ十數年來内務省地理局及中央氣象臺若シクハ東京大學等ニテ調査セル事實ヲ集積シテ之ヲ學問的ノ順序ニ從ヒテ排列シ最モ解シ易キ次第ヲ逐ヒテ説明シ殊ニ措辭ニ注意シ語勢ト云ヒ結構ト云ヒ皆讀者ヲ喜ハシムルニ足ルヲ以テ本旨トシタルカ故ニ唯ニ讀者カ日常自然界ニ處シテ有益ナル知識ヲ得セシムルノミナラズ併セテ之レヲ各人日常讀書ノ料ニ供スルコトヲ得ベキナリ著者カ著述ノ本旨ハ之ヲ中學校師範學校等ノ教科書ニ供シ且ツ農樵山林航海等ノ業ニ從テ實業家ニ便ゼントスルニアル由ナレトモ我等ハ亦併セテ教育家カ讀書ノ料ニ供センコトヲ望ムモノナリ

書中ニ挿入セル圖畫ト圖解トハ皆頗ル鮮明美明ニシテ假令西洋ノ書ニ比シテハ尙劣ル處アルニモセヨ本邦出版ノ書中ニ在リテハ先ヅ最上トシテ數フベキモノナラン且其工夫ト調査トノ新奇有益ナルハ我等ノ大ニ感服スル所ナリ云ハデモヨキコトナガラ此書ガ東京ノ學士ノ手ニ成ラヌシテ地方ノ一教育家ノ手ニ成リ今日流行セル校閱流ノ人ノ手ニアラズシテ獨力研究ヲ事トシ眞理ノ爲メニ眞理ヲ樂ミ名利ノ爲メニ眞理ヲ求メザルノ人ノ手ニ成リシハ亦此書ノ特殊ナル一美處ト云ハザルベカラズ云々

訂正再版

陸軍教授 矢津昌永氏著 (文部省檢定済)

綱要日本地理

菊判洋裝 紙數二百餘頁  
全壹册 圖版百七十餘頁  
正價金五拾六錢  
郵税金八錢

中學程度の教科書として、最も新たにして最も要を得たるもの、膨脹せしむれば優に數卷の大部冊を成すべきものを、一卷に結晶せしめたるものなれば、量は小なれども質は富み、一句一行皆我帝國の山川風土都市生産政治教育宗教交通の形勢現況を蒸餾したる精華也。

廣く世界を知れどは、列強が常に其國民を警むるの語、而かも日本人は世界を知るの前に於て、先づ日本を知るべきの階級にあり、一郷一郡を覽たりて、推して以て全國を想見せらるべきものに非ず、我邦人が活動生活の立脚地たる此絶東の帝國を知るの最捷法は、本書を讀むにあり。

帝國の位置◎地方誌：關東◎本州中部◎奥羽◎近畿◎中國◎四國◎九州及沖繩◎臺灣◎北海道◎樺太◎朝鮮◎總括：一地勢◎近海◎氣候及天産◎生業及物産◎住民◎政治◎教育◎神社、宗教◎交通◎附録。



陸軍教授 矢津昌永氏著 (文部省檢定出願中)

# 綱要世界地理

菊判洋裝全三冊  
圖版二百五十餘種

上卷正價金參拾六錢  
中卷正價金參拾六錢  
下卷正價金四拾錢  
郵稅各金六錢

## 上卷

滿洲地理：關東州○滿洲○世界地理：亞細亞洲：總說○各說—清國○亞細亞露西亞○亞細亞土耳其○亞刺比亞○伊蘭地方○印度○印度支那○馬來諸島。

## 中卷

歐羅巴洲：總說○各說—露西亞○スカンデナビヤ—瑞典△那威○丁抹○獨逸○奧地利、洪牙利○瑞西○佛蘭西附モナコ○白耳義○和蘭○英吉利○イペリヤ半島—西班牙△葡萄牙△アンドラ○伊太利附サン、マリノ○バルカン半島—希臘△土耳其△ブルガリア△羅馬ニア△セルビア△モンテネグロ。

## 下卷

亞弗利加洲：總說○各說—北部亞弗利加—埃及△バルハリ—諸島○同東部○同南部○同西部○亞弗利加屬島。○北亞米利加洲：總說○各說—カナダ○亞米利加合衆國○メキシコ○中亞米利加○西印度諸島○グリーンランド。○南亞米利加洲：總說○各說—ブラジル○北西諸國—グイヤナ△ベネエラ△コロンビア△エクアドル△秘魯△ボリビア○南部諸國—ウルグア△パラグア△智利△アルペンチナ○大洋洲：總說○各說—濠洲大陸○ニュージーランド○メラネシヤ○ミクロネシヤ。○ポリネシヤ○兩極地方：南極○北極。

陸軍教授 矢津昌永氏著

# 高等地理

菊判假裝  
六冊既刊

我邦人に地理の眞趣味を解せしめたるは、實に矢津先生に始まる、先生一たび筆を地誌に染むれば、乾燥無味なる斯學に躍々たる活氣を與へ、讀む者心動き興湧き身宛も其境を踏むの思を爲して讀み誦する間に、自ら地理的及政治的形勢、文明的進歩と衰退を味ひ會得せしめ、腦底に印象すること極めて深かるべし

歐羅巴洲	紙數	五百九十餘頁	郵正稅價	金壹圓貳拾錢
阿弗利加洲	紙數	三百餘頁	郵正稅價	金八拾錢
清國地理	紙數	三百九十頁	郵正稅價	金壹圓貳拾錢
韓國地理	紙數	二百十餘頁	郵正稅價	金八拾錢
露領亞細亞、西亞細亞、中央亞細亞	紙數	三百四十頁	郵正稅價	金壹圓貳拾錢
南亞米利加洲	紙數	五百九十餘頁	郵正稅價	金壹圓貳拾錢



藤田五郎太氏製作

### 大日本模形地圖

全壹面(百六十五分の一)  
各正價金五圓  
送料を要す

山岳高峙、原野平闊川、流蜿蜒、港灣參差、天然の地形を表現して、一目に全國の地勢を通觀せしむるは、是れ模形圖の特色にして、平面圖の遠く及ばざる所也、之を校舎、家庭の壁上に掲げ、若くは床上に安置せば、子弟の地理思想を發揮する大也。

同氏製作

### 京都及近江八景模形地圖

全壹面(十五分の一)  
正價金四圓  
送料を要す

同氏製作

### 清韓凸型地圖

全壹面  
正價金五圓七拾五錢  
送料を要す

同氏製作

### 富士箱根附近模型圖

全壹面  
正價金四圓  
送料を要す

地型堂製作

### 東京静岡間模型

全壹面(廿萬分の一)  
定價金拾參圓  
送料を要す

本模型は富士山の雄姿中央に屹立し、右に關東丹澤の兩山脈を連ね、潤然遙かに展開するは關東大平原なり、馬入、酒匂、多摩、荒川の諸川其間を流れ、東京の大市爰に位置す、富士の右翼には、赤石山脈崛起して、白峰の雪嶺聳へ、後へは甲府盆地にして、富士川洋として富士、赤石兩山脈の間を貫流し、前面には縹渺たる駿河灣、相模洋、東京灣を控へ、江之島、鎌倉、大磯、國府津、熱海、興津、三保等の景勝地、點々指順の間であり、眞に本邦天然美の鐘る處にして、又地理上總ての形勢を具備する理想的同表地也

同

### 箱根火山模型

全壹面(六萬分の一)  
定價金七圓  
送料を要す

本模型は世界稀有の大火山脈にして、而かも標式的火山たる箱根火山を、震災豫防調査會報告地圖によりて現はしたる、コントロール曲線式、及び曲線塗抹式の兩様あり、中央火口丘、火口原、火口原湖、外輪山、火口壁、噴火口、爆裂口、火口湖等悉く一目の下に集り、切開火山の面目躍如たれば、我火山國民に火山を了解せしむるに、最好の標品たり

農商務省地質調査所編製

### 英和兩國大日本帝國地質圖

全壹面  
正價金五圓五拾錢  
送料を要す

我國に於ける最も新なる最も確かなる、又最も精細なる地質圖也、其内容は本州四國九州北海道本島及び朝鮮は縮尺二百萬分の一、樺太千島、臺灣及び關東州は四百萬分の一を以て示し、左の上方には千二百萬分の一なる日本帝國總覽圖を劃出し、二十一種の色彩を用ひて一目の下に全幅に蜿蜒たる帝國が如何に多くの地質より成れるやを明瞭ならしめり、紙質着色俱もに良巧を極む。

### 英和兩國大日本帝國鑛產圖

全壹面  
正價金五圓五拾錢  
送料を要す

各地所産の鑛物は着色を用ひて其種類を別ち、金鑛には金粉、銀鑛には銀粉を用ひ其他鉛、銅、鐵、安質母尼、錫、滿庵、亞鉛、黃鐵、黑鉛、石炭、石油、硫黃等各特異の色刷りや施し光彩陸離、點粧自ら趣を成し單に紙質の良、印刷の美を以てするも衆目を奪ふに足る、然り而して調査の精確周匝なるは其出所に徴して知るを得ん。



矢津昌永氏著

### 日本政治地理

菊判洋裝全壹册  
正價金壹圓七拾錢  
郵税金拾貳錢

我帝國の活動方面を地理的に説明せるもの、内容は、總論、國土、人民、郡制、經濟、交通、生業及物産、外交等にして、大和民族の活ける反映なり。

鐵道院藏版(明治四十五年五月新版)

### 大日本鐵道線路圖

折本  
正價金壹圓七拾五錢  
郵税金拾貳錢

(縮尺百萬分の一。横巾八尺四寸堅二尺八寸)

五千哩の視察を開きてのち僅に數年、今や近日落成する、施工中のものを併せて全國鐵道線路は、七千二百六十三哩に達す、其發達の迅速なる真に驚嘆するに足るものあると同時に愈々延長線を精しうすべし必要あり、改訂鐵道線路圖は四十五年(即ち本年)五月の現在調査にして官私線、幹線、支線、大小停車場、國境、山河、都市の所在等一目分明也、交通業者は勿論、各官衙、各會社、各銀行、ホテル業者、旅行者、及び一般地理研究者は之を座右に離す能はざるべし

陸軍歩兵中佐 守田利遠氏編

### 滿洲地誌

菊判洋裝全四册  
正價金五圓五拾錢  
郵税金貳拾八錢

本書は地誌を標榜するも實は一種の滿洲百科全書なり、總論、地理、政體、殖産興業、運輸交通、宗教教育風俗衛生、化外區域、滿蒙西伯利亞と山東人の八編に大別す、著者は我陸軍部内第一の滿通にして、參謀本部の慈恵によりて此大著を成せり

理學博士 岡田武松氏著

### 氣象學講話

菊判洋裝全壹册  
正價金壹圓  
郵税金拾貳錢

本書増補第三版成る

緒言○大氣○溫度○濕度○氣壓○飽和と凝結○露と霜○霧と雲○雨と雪○霞と雹○樹氷と凝霜○風○空の色○低氣壓○高氣壓○雷雨○龍卷○天氣豫報○天氣俚言○暴風警報○長期豫報○高層氣象○氣候○天候障害○氣象器械

東京工科大學教授 工學博士 鴨居武氏著

### 最新寫眞術

四六判洋裝全壹册  
正價金壹圓七拾錢  
紙數四百四十餘頁 郵税金拾貳錢

本書の解説は秩序あるを以て讀者の理會に入り易く、應用は諸般の方面に渉るを以て廣く斯術の知識を獲。

第一編 總説○第二編 光線：物理的性質○化學的性質○光線○光力測定○第三編 寫眞機械及攝影場：暗箱及其附屬品○鏡玉○暗室○攝影場○第四編 陰畫調製法：乾板法○濕板法○第五編 陽畫調製法：鹽化銀法○臭化銀法○沃化銀法○鐵鹽類を用ふる陽畫法○重クロム酸鹽類を用ふる陽畫法○第六編 幻燈：普通幻燈○實物幻燈○第七編 天然色寫眞：直接法○間接法即ち三色寫眞法○第八編 特殊寫眞法：針孔寫眞○閃光寫眞○夜景寫眞○望遠寫眞○全景寫眞○顯微寫眞○實體寫眞○活動寫眞○電送寫眞○氣球寫眞○水底寫眞○活光寫眞○分光寫眞○天體寫眞○銃丸寫眞○陶器寫眞○漆器寫眞○合相寫眞○戲謔寫眞○第九編 件

東京理科大學教授 理學博士 三好學氏著

### 日本之植物界

菊判背革美裝全壹册  
正價金六圓  
紙數七百四十頁 郵税金貳拾四錢

平易流麗なる本書に就て我邦の植物を四季の序に順ふて讀過するは、興趣娛樂の中に科學的知識を收得するなり、眼前に賞する花は散り葉は枯るるも書中の花木は永久に吾人を悦ばしめ又吾人を益す。

第一編 春：春信○梅○根柢○櫻○中春の花木○春の野邊○菜園○躑躅○晩春の花弁○松○竹○新緑○第二編 夏：夏草○蕨○杉○蕨類○果實と種子○蔬菜○風害○老樹の歴史○名木の保存○菊○秋の林○第四編 冬：冬の森○冬の庭○氷雪の影響○植物の越年○温室○熱帯植物○植物研究の趣味

三好博士著 日本植物景觀

第一集より第十四集まで 出版

四六二倍判假綴、日英兩文 各 正價金六圓  
寫眞版各集七枚乃至九枚 郵税金壹圓



25293

丸善株式會社發行工業書目

工學士 宮城音五郎氏著 <b>機械學</b> 菊判洋裝 全參册 正價各金壹圓全錢郵稅各金拾貳錢	工學博士 安永義章氏校閱 舊製鐵所技師 浦上正二郎氏編 <b>機械設計及製圖</b> 菊判洋裝 全貳册 正價金貳圓七拾錢 郵稅各金八錢	工學博士 安永義章氏校閱 舊製鐵所技師 浦上正二郎氏編 <b>機械設計實用表</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金壹圓九拾五錢 郵稅各金拾貳錢	甘利忠氏編纂 <b>鐵工要具</b> 解說及作業一斑 菊判假裝 全參册 上卷 正價金壹圓五拾錢 郵稅各金八錢 中卷 正價金壹圓五拾錢 郵稅各金八錢 下卷 正價金壹圓五拾錢 郵稅各金八錢 今本七十郎氏編纂	訂增 <b>木工手便覽</b> 袖珍總革綴 全貳册 正價金參圓 郵稅各金八錢	理學博士 水野敏之丞氏著 <b>無線電信電話論</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金四圓五拾錢 郵稅各金八錢	理學博士 水野敏之丞氏著 <b>電子論</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金貳圓廿五錢 郵稅各金八錢	海軍機關少佐 中條清三郎氏著 <b>訂正電氣計算法</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金貳圓廿五錢 郵稅各金拾貳錢	增補 <b>訂正電氣計算法</b> 菊判洋裝 全參册 正價金參圓五拾錢 郵稅各金廿四錢	工學博士 荒川文六氏著 <b>訂正電氣學</b> 菊判洋裝 全參册 正價金參圓五拾錢 郵稅各金廿四錢	改訂 <b>訂正電氣學</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金壹圓八拾錢 郵稅各金拾貳錢	工學博士 鳳秀太郎氏著 <b>鳳氏交流工學交流理論</b> 四六判洋裝 全壹册 正價金壹圓八拾錢 郵稅各金拾貳錢	工學士 鶴見一之氏 工學士 草間偉武氏共著 <b>土木施工法</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金貳圓五拾錢 郵稅各金拾貳錢	林學士 石丸文雄氏著 <b>土木應用力學</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金貳圓 郵稅各金拾貳錢	佐々木恒太郎氏編輯 <b>土木設計實用公式</b> 袖珍洋裝 全壹册 正價金壹圓五拾錢 郵稅各金八錢	工學博士 田邊明郎氏編 <b>公式工師必携</b> 袖珍總革綴 全壹册 正價金參圓 郵稅各金拾貳錢	工學博士 田邊明郎氏著 <b>水力学</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金壹圓五拾錢 郵稅各金拾貳錢	工學士 栗原忠三氏著 <b>水力事業論</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金壹圓六拾五錢 郵稅各金拾貳錢	眞住衛平氏著 <b>發電水力</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金壹圓貳拾錢 郵稅各金拾貳錢	中島、廣井、中山、服部、柴田、君島六工學博士共編 <b>英和工學字典</b> 四六判洋裝 全壹册 實價金壹圓 郵稅各金八錢	工學博士 田中芳雄氏 工學士 安藤一雄氏共著 <b>最化學工業試驗法</b> 菊判洋裝 全貳册 正價各金貳圓半錢 郵稅各金六錢	理學博士 加藤與五郎氏著 <b>化學工業大要</b> 菊判洋裝 全壹册 正價金壹圓四拾錢 郵稅各金拾貳錢
--	--	--	---	---	---	---	--	--	---	--	---	---	--	---	--	---	---	---	--	--	---



終

